



2026年1月13日
鳥取県立倉吉東高等学校
宋 志連

進路指導とは Career guidance

1 はじめに

本校は鳥取県のちょうど真ん中のあたりに位置する普通科高校です。あと3年後には創立120周年を迎える伝統校で、「文武両道」を校訓に多くの優秀な卒業生を世に輩出してきました。2022年にIB認定校となり、2023年入学生8名がIB 1期生として学びました。この3月に1期生は卒業します。この1期生の担任としての経験をこちらで共有させていただきます。

2 2年間の進路指導の実際について

①IBクラスの担任としての進路指導

私は教員としてスタートしてから、その多くの期間を担当、特に3年生の担任として勤務してきました。昨年度、IB 1期生の担任として私自身が初めて挑戦する「IB生の進路指導」がありました。

IB生には全国模試も偏差値もありません。また、国内の入試の形式も共通テストというわけにはいかず、総合型選抜（その中でも特にIB入試）やスコアのみのお願、さらに海外大学へのお願（国により異なる形式）と未知の世界が広がっています。どのように進路指導をすべきなのか、そもそも進路指導とは何かについて再考するきっかけとなりました。IB生の進路指導について一から学ぶ中で、自分の知見がいかに狭いものかを改めて痛感しました。しかし、IBを選択した勇気ある生徒の未来への一歩をなんとかサポートしたいという強い気持ちはありました。

そこで、早い段階から「進路は自分のこと、自分で考えること」という意識を持ってほしいと考え、IBの授業が始まった高校2年次生の夏休み前から、夏休みを利用して、オープンスクールに必ず参加することを生徒に投げかけました。実際に大学に行き、キャンパスの雰囲気、街の様子を感じることは生徒の進路選択と強く関連します。また、ほぼ毎月面談をし、進路選択やそれに関する行動などを生徒と情報共有しました。高校2年次の秋からは回数を決めずに生徒たちが自分の言葉で進路選択について語れるようになるまで、何度も面談を繰り返しました。同時に、保護者の協力は生徒の進路実現には不可欠です。こちらでも月に一回程度で保護者会を開き、疑問や意見を受け止め、共有する場を作ることになりました。保護者もIBについては初めてのことばかりです。多くのIB校の先生方にお世話になり、IB生の進路についての経験を共有していただきました。改めてここで感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

②今までの進路指導と異なる点

生徒との面談で気がついたことは「誘導しない」ということです。私たちは時に既知のものを絶対視する傾向があります。しかし、それでは生徒が自分自身で進路を見つけることにならない場合もありますし、これだけ変化の激しい時代に絶対視をすることは避けたいと考えました。したがって、既知のものの中から「こんな選択肢がある」「こちらには別のものもある」というふうに、私から生徒に選択肢を多く提供することは控えました。それよりも、よくわからない森に足を踏み入れてしまったような生徒の迷いに溢れる話



オープンキャンパスに行った報告をクラスの中で行った時の様子

を聞き続け、生徒の発した言葉を拾い、それを再提示することに配慮しました。そして、生徒が自分の発した言葉から進路を選択する糸口を見つけ、糸を手繰り寄せる作業にのんびりと付き合いました。数値やデータよりも思考した過程を確認しながら、思考が拡散しすぎないようにすることに配慮したつもりです。

また、今まで以上に専門家に頼ることにしました。鳥取県教育委員会のご配慮により、学校外のIBに関する専門の知識のある方から学ぶ機会を得ました。生徒を支援するための様々なアプローチに関する知識やヒントを得ることができたことはアンラーニングのきっかけになったと感じています。

③生徒の進路決定

生徒の進路について、生徒の志望のみを重視し、それ以外の要素は重視しませんでした。時に教員は実現可能性などという目に見えない正体不明のものに囚われてしまいます。勿論、生徒自身が今まで実行してきたことと学部学科がアンマッチだと見える時はそのギャップをどのように乗り越えるつもりかについては質問しましたが、それよりも「将来何がしたいのか」と「選択した大学や学部」とのつながりが明確であるかどうかは私にとっては重要でした。偏差値や知名度よりも生徒がたどり着いた第一志望を最優先しました。

3 見えてきたこと

2年間の担任の経験を通じて、私自身は新しい進路指導観を得ました。私にとって進路指導とは「機を待つ」ことです。また、自分の過去の経験や自分の価値観を押し付けるのではなく、生徒が自分で進路選択をする、責任を持って自分で選択したと言えるような「仕掛け」や「仕組み」を設定することです。勿論、そのためには組織として取り組むべきこともありますし、担任として取り組むべきこともあります。どちらにせよ、生徒が自分自身で進路を選択することを目指し、生徒がその選択にたどり着く瞬間と一緒に待つことが担任の役割だと私は考えています。